



追悼

森田茂先生

洋画家で文化勲章受章者の森田茂先生（筑西市名誉市民・茨城県名誉県民・筑西ふるさと大使）が3月2日、東京都内で逝去されました。101歳でした。

森田先生は、主に日本の郷土芸能や民俗行事などを描き、絵の具を厚く盛り上げた色彩豊かな作風で知られました。昭和45年に「黒川能」で日本芸術院賞。平成元年に文化功労者、そして、平成5年には文化勲章を受章しています。日本洋画界の黎明期を支え、発展に寄与されてきた森田先生の功績をご紹介します。

森田茂先生は明治40年、真壁郡下館町本城町に生まれました。

絵を本格的に描き始めたのは、大正13年に茨城師範学校（現・茨城大学）を卒業し、教員として真壁郡大田尋常高等小学校（現・大田小学校）に赴任したころから。「大田小学校時代は楽しかった。子供たちを連れて、筑波山の写生によく出かけました。図画の時間は素描（デッサン）を中心に教えました。私がいまにもデッサン

デッサンと口にするので、学校中で『デッサン先生』と呼ばれるようになっちゃった」と文化勲章受章時に本紙のインタビューに笑顔で答えた森田先生。

このころから画家になる夢を徐々に膨らませていきます。

画家を志す

昭和3年、大田尋常高等小学校を退職して上京、都内の小学校で図画教師をしながら、盛んに絵を

描く日々が続きました。

昭和6年、茨城県出身の洋画家・熊岡美彦が開設した洋画研究所に入所。スケッチ旅行で訪れた飛騨高山のお祭りや、金蔵獅子と呼ばれる獅子舞と出会い、自然風景よりも郷土芸能や民俗行事に興味を持つようになります。

昭和7年に東光会が結成され、翌年の第1回展に出品した『白衣』が入選。その翌年、帝展に出品した『神楽獅子の親子』が初入選を果たし、画家としての第一歩が始まりました。

東光会会員となった昭和13年には、第2回新文展で『金蔵獅子』



足腰が弱くなってからも作品づくりへの意欲は衰えることはありませんでした。

が特選を受章し、作品は外務省の買い上げとなり、イタリアのムッソリーニ首相に贈呈されました。

昭和14年に妻の初子さんと結婚。戦後の一時期は初子さんが海

産物売り歩くなど生活を支えました。「戦前・戦後の混乱期に画家を続けられたのは妻のおかげ。感謝していますよ」と生前よく語っていました。

その初子さんも8年前に88歳でこの世を去りました。

黒川能との出会い

ライフワークとなる山形県の『黒川能』と出会ったのは昭和41年。「黒川能は、都会の洗練された能とは違って、普段は野良に出て働いている地元の人たちが神に捧げるためにやる能。東北弁の謡が格別でね。人間本来の魂が揺さ

ふるさと下館を愛す



「ぼくの職場は足の踏み場もないような所で、歩ける道は獣道（けものみち）のようだからね…」。作品に囲まれ無心でキャンパスに向かう森田先生。（自宅アトリエにて）

ぶられるような感動がありました。ぼくは、黒川能そのものを描くんじゃなくて、それを見て感動したものを図画にしているんです」と森田先生は回顧しています。

この年、第9回新日展に出展した、『黒川能』が文部大臣賞を受賞。昭和45年には、日本芸術院賞を受賞しました。

昭和51年日本芸術院会員、昭和52年には東光会初代理事長に就任し、さらに勲三等瑞宝章を受章。昭和57年に日展顧問。そして、平

成元年には文化功労者に選ばれました。

文化勲章を受章

「これまで、何も考えず、ただ絵を描いているうちに、いつの間にか勲章が来たわけです。天皇さまから免状と勲章をいただくのはなかなかいいものですよ。もちろん下館のみなさんの応援のおかげです」。平成5年に文化勲章が贈られたときに語った、飾り気の無い森田先生らしい言葉です。

これらの功績が称えられ、平成4年に下館市名誉市民、平成5年には横山大観、板谷波山に次ぐ茨城県名誉県民に推挙されました。

下館は制作活動の源

「下館は、私の生まれ育った地というだけでなく、私にとって制作活動の根源です。よそのまちは違う重量感と素朴な感動がある下館の神輿。祇園囃子の太鼓のたたき方にしても、優美というよりも、ちよつと荒々しいところがおりもしろい文化だと思えますよ」。昨年、富山省三市長が東京目白のご自宅を訪ねたときに、故郷下館を語っています。

市ではこれまでに、油彩画やデッサンなど54点の寄贈を受けています。子どものころから、薪能や絵画、陶器など本物に接することが大切であると森田先生は言い続けていました。その強い思いが本市の文化の向上につながっていることは言うまでもありません。

亡くなる直前まで、車いすに座りキャンパスに向かっていた森田先生。精力的に新作に挑み、常に日本洋画界の先駆者たらんとしていました。そして、平成21年3月2日、80年以上握り続けていた絵筆を置くことに。享年101歳。ご冥福をお祈りいたします。

師 森田茂先生 ふるさとへの思い

洋画家 飯泉俊夫さん（小林）
（東光会常務理事・日展評議員・筑西ふるさと大使）

晩秋の朝の庭で先生は一人油絵を描いておりました。キャンパスについた黄色いいちよの葉が、まるで絵のよう美しく見えたものです。私が森田先生の門をたたいたのは、昭和40年11月。あれから、時は夢のように過ぎました。

先生はよくふるさとのことを話されました。幼少ころの本城町周辺。田町の急な坂道を。中広い大町通り。埋めたてを始めたころの下館駅前。

八丁台からかけ下りてくる土を運ぶトロッコ、ひるがえる土工のはんてん。田の中にぼつんと在ったお稲荷様。中館台から眺めた筑波山。下館小学校から見おろした光る勤行川。それらの風景はかぎりなくなつたかかったのでしょうか。

先生の呼吸が日ごとにか細くなってきたある日、私は病室で先生と二人だけの時を過ごすことができました。静寂の中で先生の安らかな顔が神々しく見えました。

「先生、長い間たいへんお

せわになりました。先生がお示し下された文化はこれからみんなで真剣に守らせていただきます」。悲しみを飲み込みながら申しあげると、先生の目に細い涙が光りました。私は手を握りかえし、

「きょうでいよいよお別れかもしれません」というせつない思いをへやに残して、去りがたく病室を出ました。

巨星は大地におちました。たくさんの人達が限りない大恩をいただきました。空風火水土、森田先生どうぞ安らかにお休み下さい。



上野の森美術館で開催された、第73回東光会展で森田茂先生を案内する飯泉俊夫さん。